

ウラル・アルタイ学会についてー日本語学史拾遺(4)

長田俊樹

1. はじめに

「日本語学史拾遺」と題して、これまで大阪言語学会について述べ(長田 2021、2022a)、その後静安学社について論じた(長田 2022c)。

大阪言語学会は、東洋学者の石濱純太郎が1942年2月に創立発会した学会である。また、石濱は浅井恵倫、財津愛象、高橋盛孝、ニコライ・ネフスキーとともに、1927年には静安学社を設立している。これらは戦前に設立された学会である。また、戦後にはウラル・アルタイ学会と浪華芸文会を設立している。その概要については、長田(2022b)で述べた。これらの活動が日本語学史には登場しないだろうということや、それでもぜひ顕彰しておきたいという思いから「日本語学史拾遺」と名付けた。石濱純太郎の周りに集まった人々については、「石濱シュレーの人々」と題して連載している¹。この二つは関連している。前者は研究活動に焦点をあて、後者は人に焦点をあてている。

今回はウラル・アルタイ学会に焦点をあてる。

長田(2022b)ですでに紹介したが、1950年5月に設立されたウラル・アルタイ学会の紹介文が『史林』に掲載されている。それをここでもう一度引用しておこう。

戦後、ややもすれば「東洋」にたいする関心が薄れ勝ちとなり、わけても北アジアにたいする興味の減退は著しいが、専門学界にあつても近来「北アジア学」の低調が憂えられる矢先、昨二十五年五月、石濱純太郎教授を中心に結成された「ウラル・アルタイ学会」は、大阪、天理、神戸各外大の東洋語ことに北アジア語学のメンバーに加えるに、阪大、神戸大、関西大など阪神方面の東洋史専攻者を以てし、北アジア語学と東洋史学、さらに民族学にたづさわる人々によるコーオペレーションをなしとげんとしつつあり、この意味において新しい成果が斯界の今後に期せられるのである。なお、すでに大阪にあつては、懐徳堂を根拠として発足した静安学社があり加えて昭和十六年、大阪言語学会が成り、いづれも東洋学関係者を抱合しつつ、逐次成果をあげ来つたのであり、これらの基盤の上にこそ、斯会の誕生もまた可能であつたといえよう。

五月に発足、七月以後諸事情のためしばらく休止状態ののち、越えて十一月より再び活

¹ これまでに、長田俊樹(2022d)「宣教師的語学者・渡部薫太郎ー石濱シュレーの人々(1)」『KOTONOHA』233:1-44を發表している。今後、財津愛象、大島仲太郎、西田長左衛門を取り上げる予定で準備している。

動を開始して年末に及んでいる。左に例会の講師と演題とを記しておく。(敬称略)

五月	挨拶	石濱 純太郎
	蒙古語文法書に及ぼせる西藏語文法書の影響	稲葉 正就
六月	外蒙におけるロシア文字使用について	松 源一(精松源一か)
	町と村	高橋 盛孝
七月	女真文字金石資料とその解説	長田 夏樹
十一月	浪華芸文会との共催	
	満洲語の研究	石濱 純太郎
	朝鮮に関する研究	高橋 亨
	遊牧社会と農耕社会との接触について	岩村 忍
十二月	二三近著の紹介ーエーベルハルト教授の近業ー	内田 吟風
	西藏語尾辞 Pa, ba, ma などの問題について	稲葉 正就

史林 (1951), 34(3):302-303

これがウラル・アルタイ学会について書かれた、唯一の報告である。

今回、新たに小論を書こうと思い立った理由は、ウラル・アルタイ学会の会則を石濱文庫所蔵の石濱純太郎宛書簡の中に発見したからである。そこで、まず石濱純太郎宛書簡について述べておく。

石濱文庫所蔵の石濱純太郎宛書簡は、玄幸子関西大学教授と高田時雄京都大学名誉教授のお二人によって整理されている。それについて、玄が以下のように述べている。

大阪大学総合図書館石濱文庫には、まとまった資料として石濱純太郎宛書簡がクリアファイル 20 冊に整理番号を付して収められている。ただし、その内容については未整理であったため目録を作成しその全 2328 通について調査整理を経た結果、石濱自身が外遊中に自宅へあてた 3 通および整理番号のみ残留し本体の所在が不明である 2 通を除いて、972 か所の差出人からの書簡が確認できる。玄(2023:(39))

上記の書簡目録はまだ公刊されていないが、玄教授ならびに高田名誉教授のご厚意でリストのコピーをご恵送賜った。この場を借りて感謝申し上げます。

また、玄(2022:63-70)には、それら書簡の差出人リストが掲載されている。その中に、「ウラル・アルタイ學會假事務所 (大阪外大内)」からの書簡がある。これを含め、いくつかの書簡について、石濱文庫の特別閲覧申請²をして写真撮影の許可を得て、2022 年 1 月 11 日、2 月 1 日、3 月 15 日の 3 回に分けて調査をおこなった。その時の調査成果の一部をここに発表する次第である。

² 特別閲覧申請の方法などについては、高田時雄京都大学名誉教授がご教示くださった。謝意を表したい。

また父長田夏樹の遺品の中に、ウラル・アルタイ学会関係のハガキや手紙が多く残されており、とくに楠松源一からの書簡にはウラル・アルタイ学会の例会への言及があるので、それらについても小論で述べる。

コロナ禍でインドに行けなくなって家にいる時間が多くなったのを契機に、石濱シュールの研究を始めたのだが、これまでの拙論によって、静安学社と大阪言語学会については、かなりのことがわかってきた。しかし、戦後に始まったウラル・アルタイ学会については、まだまだわからないことが多い。小論によって、ウラル・アルタイ学会の実態に少しでも近づければ幸甚である。

2. ウラル・アルタイ学会会則

石濱書簡目録のファイルナンバー2の183番に「ウラル・アルタイ學會假事務所（大阪外大内）」からの封書がある。そこには、以下に述べるように、ウラル・アルタイ学会々則（案）と第1回例会の案内が入っていた。またウラル・アルタイ学会々則（案）には、石濱が書いたと思われる鉛筆で修正が施されていた。これらをすべてここで紹介する。なお、これらはガリを切った謄写版で印刷されたものである。

ウラル・アルタイ学会々則（案）

1. 本会はウラル・アルタイ学会（仮称）と稱する。
2. 本会はウラル・アルタイ語圏を中心とする諸地域の文化一般を研究し、併せて会員相互の親睦を図るを以て目的とする。
3. 本会は本会の趣旨に賛成する京阪神付近在住の者を会員とする。
4. 本会は幹事を置き事務を処理せしむ。その任期は一年とし重任するを得。
5. 本会の事務は概ね次の如し。
 - イ) 年度初めに総会を開き、事業報告、役員選挙を行ふ。
 - ロ) 研究発表のため例会を開く。
 - ハ) 事業報告名簿の発行。
6. 会費は年額 円とす。
7. 本会は事務所を大阪外国語大学蒙古語学研究室に置く。
8. 会則の変更は総会に於て出席会員過半数の決議に依るものとす。

S.25.5.7.

これが原案であるが、この上に鉛筆書きで修正が加えられた別紙がもう一枚ある。修正部分に下線を引いて以下に示す。

ウラル・アルタイ学会々則

1. 本会はウラル・アルタイ学会 (Society of Ural-Altai Studies) と称する。
2. 本会はウラル・アルタイ語圏を中心とする諸地域の言語歴史其他文化一般を研究し、併せて会員相互の連絡親睦を図るを以て目的とする。
3. 本会の趣旨に賛成する、付近在住の者を会員とする。
4. 本会は幹事を置く。幹事は事務を処理する。その任期は一年とし重任し得る。
5. 本会の事務は概ね次の如し。
 - イ) 年度初めに総会を開き、事業報告、幹事選挙を行う。
 - ロ) 研究発表のため例会を開く。例会は五、六、七、十、十一、十二月の第一日曜日とする。
 - ハ) 会報名簿等の発行。
6. 会費は年額 百円とする。
7. 会則の変更は総会に於て出席会員過半数の決議に依るものとする。
8. 本会は事務所を大阪外国語大学蒙古語学研究室 (高槻市) に置く。

S.25.5.7.

旧仮名遣いなどを直したのと、会の英語名と例会の日程を追加したほかは大きな修正点はない。7. と8. を入れ替えたのも形式的なものである。このウラル・アルタイ学会の会則が最終的に、鉛筆で修正したものとなったかどうかは確認できていない。

これに加えて、以下の挨拶状がこの「ウラル・アルタイ學會假事務所 (大阪外大内)」からの封書の中にあった。そちらも以下に引用する。

拝啓 新緑の候益々御清祥のことゝ存じます。

扱て乍早速近頃北方研究が少々低調に見受けられますので、此の際同学の士相集ひ大いに研鑽の実を挙げようと言ふ事になりました。

どうか奮って御賛同の程願ひします。

尚左記に依り創立総会を兼ねて第一回例会を開き度いと思ひますので御来会下さいませれば幸甚です。

早々敬具

昭和二十五年五月一日

ウラル・アルタイ学会 (仮称) 創立発起人

石濱 純太郎

佐藤 誠

長田 夏樹

岡崎 精郎

桑田 六郎

山崎 忠

川崎 直一
外山 軍治
精松 源一
宇野 章

記

- 一. 日時 五月七日（日曜日）午後一時
一. 場所 大阪外国語大学大阪学舎（上本町八丁目電停）
一. 講演 1. 「ウラル・アルタイ学の処女地」石濱純太郎
2. 「蒙古語新資料の紹介」精松源一

まず、発起人についてみておこう。

石濱純太郎と父長田夏樹についてはここでとくに取り上げない。それ以外の人についてみていこう。

佐藤誠³（1908-1981(?)）は東京生まれで、1936年4月、東京帝国大学言語学科に入学。小倉進平、金田一京助に言語学をならう。小倉進平のウラル・アルタイ比較言語学の講義を聞いて、トルコ語の研究を決意する。1940年に大学院を修了し、1944年5月に蒙古善隣協会副参事、興亜義塾教授に就任。そこで長田夏樹と出会ったという。興亜義塾ではウイグル語を学び、それが根拠でウラル・アルタイ学会の発起人に名を連ねたのであろう。しかし、戦後は天理大学、北海道学芸大学(現・北海道教育大学)函館分校、札幌大学、琉球大学と職を転々としたが、方言や児童言語に関心を持ち、アルタイ語の研究はあまり続かなかつたようである。小論の付録に、「経歴と業績」を掲載しておく。

岡崎精郎⁴（1920-1993）は、旧制浪速高校から京大東洋史に進み、阪大助手から追手門学院大学に移り、現職のまま亡くなった。博士論文『タングート古代史研究』（1972年刊行）で代表されるようにタングート（西夏）史の研究で知られ、ウラル・アルタイ学の中心からは外れる。しかし、石濱純太郎の信奉者だったので、学生時代から静安学社に出入りし、石濱が設立した大阪言語学会や浪華芸文会にも参加している。また、石濱が亡くなった後に、蔵書が大阪外大に寄贈され石濱文庫として知られるようになったが、その石濱文庫の整理をおこなった。その石濱文庫に残された石濱書簡を使って、数々の文章を残した人である(岡崎1979・1983・1984)。筆者の石濱シュレー研究には欠かせない資料を提供してくれ、静安学社の講演会をまとめた長田(2022c)は岡崎の論文に多くを追っている。

桑田六郎（1894-1987）は、1918年に東大東洋史学科を出て、1928年台北帝大の教授となり、終戦後しばらく国立台湾大学に留用され、1948年になって帰国し、翌年から大阪大学

³ 佐藤誠(1975)「経歴と業績」『琉球大学語学文学論集』20:6-12を参照した。また、父の遺品にはかなりの数の佐藤誠からの手紙とハガキがあり、年賀状の最後が1981年なので、それを死亡年と推定したが、あくまでも確認したわけではない。

⁴ 近藤治(1993)「岡崎精郎教授の急逝を悼む」『東洋文化学科年報』8:23-25に略歴などが掲載されている。

教授となった。このウラル・アルタイ学会設立の頃は阪大教授であった。山本達郎(1988:217)によると、「桑田博士の学問上の業績は、初期のものには中央アジアのイスラムやウイグルの歴史を取り扱ったものがあるが、九割近くが東南アジアを中心とした南方の諸国、および南海の交通史に関する研究である」という。はたしてウラル・アルタイ学会の発起人にふさわしいのか。初期の研究への考慮し、また石濱の依頼に断れなかったのかもしれない。

山崎忠⁵ (1916-1956) は四国の伊予松前町に生まれた。1938年、天理外国語学校支那語部卒業し、すぐに天理外国語学校助手に採用される。1939年、大陸に渡り、蒙疆聯合委員総務部事務官補となり、蒙古聯合自治政府で要職を務めた。その頃、父長田夏樹と出会い、日本帰国後も交流が続いた。1946年4月に帰国後、天理図書館に勤め、1951年からは天理大学助教授となる。1954年、京都大学学術調査隊に参加し、アフガニスタンのモゴール語調査をおこなった後、イランのテヘランに滞在中自殺したらしい⁶。父によると、「オレは忠さんに中国語を習い、オレが忠さんにモンゴル語を教えた」と言っていたが、日本帰国後もよく一緒に研究をしたのだそうだ。山崎忠がテヘランで亡くなったのち、アフガニスタンで発見されたゼルニー文書⁷は父の手によって解説出版されたのだから、よほどの縁だ。いずれにせよ、山崎忠はアルタイ語プロパーとしてウラル・アルタイ学会にふさわしい人材であったことはまちがいない。

川崎直一 (1902-1991) についてはすでに長田(2023:(86))で述べたが、基本的にはエスペランチストである。メイエ『世界の言語』のフィル・ウゴル諸語の章を翻訳しているし(川崎 1954)、大阪言語学会でエストニア語⁸について発表したことがあるので(長田 2021:2)、

⁵ 諸井慶徳(1956)「山崎忠氏を偲ぶ」『東方宗教』11:87-88に略歴や業績などが掲載されている。

⁶ 天理図書館で山崎忠と一緒にいた田中克己の日記(インターネットで公開中)によると、「自殺らしきこと中山正善、貝塚茂樹氏らの追悼にてわかる」とある。調査隊で同行した梅棹忠夫は「狭心症」と書いている。梅棹さんに、その辺の真意を直接お聞きしたことがあるが、「それはちょっと」と口をつぐんで教えて下さらなかった。山崎忠については稿を改めて書きたいと思っている。

⁷ 国会図書館のデータによると、*The Zirni manuscript : a Persian-Mongolian glossary and grammar / by Shinobu Iwamura, with the collaboration of Natsuki Osada and the late Tadashi Yamasaki* とある。ペルシア語もモンゴル語も知らない岩村忍の名前で出版されているが、今ならこれもコンプライアンスの対象になろう。岩村忍は今や『マルコポーロ』(岩波新書)の剽窃で有名であるが、この辺の倫理は極めて薄いといえよう。この文書はアフガニスタンの村 Zirni で発見されたことから英語では「Zirni manuscript」と呼ばれている。この Zirni については、探検隊の報告書(木原均編 1956)では日本語でゼルニと呼ばれているので、言及するときはゼルニで統一しておく。ただし、長田夏樹年譜にはジルニー・テキストとなっている。

⁸ 長田(2021:8)では「ヨーロッパの屈折言語であるエストニア語」と述べた。これについて、風間伸次郎東京外国語大学教授から「同じバルト三国でもエストニア語だけは印欧語族バルト語派ではなくウラル語族の言語ですので、多分に膠着的な言語ではないかと思えます」とのご指摘を受けた。たしかに、エストニア語はウラル語族に属し、この文章の時にはそこを確認せずに印欧語だと思っていたために屈折言語と記してしまった。ご指摘に感謝するとともに、ここに注として示しておく。

ウラル語に関心を寄せていたのであろう。ただ、ウラル諸語の専門家とはいいがたい。石濱とは大阪言語学会を共同で設立し、幹事として大阪言語学会を運営していた関係上、このウラル・アルタイ学会にも参加したと思われる。

外山軍治⁹ (1910-1999) は、住吉中学、旧制大阪高校を経て、1933年京都帝国大学文学部史学科卒。羽田亨の指導の下、外務省文化事業部助成金を受け、満蒙研究に従事し、1962年「金朝史の研究」で、文学博士（京都大学）の学位を取得した。外山もウラル・アルタイ学会にとって、必要な人材であったことは経歴からも明らかだ。

精松源一 (1903-1993) は、大阪外国語学校蒙古部の第1回卒業生である。1929年、母校大阪外国語学校の蒙古語部講師となり、戦後大阪外国語大学となつてからもずっと、1968年定年退職するまで、モンゴル語科の主任教授であった。モンゴル語研究の第一人者として、ウラル・アルタイ学会では幹事を務めた。

宇野章については、大阪外国語学校同窓会本部編『会員名簿』によると、昭和17(1942)年、蒙古部を卒業している。また、『大阪外国語大学七十年史』によると、「家業を継いで実業家としてたち、モンゴル語研究者としても著名な本学非常勤講師宇野章 (20回) (274頁)と紹介されているが、それ以上のことはわからない。このウラル・アルタイ学会発足時には、非常勤講師としてモンゴル語を教えていたことはまちがいない。

以上が発起人である。

まず最初に指摘しておきたいことは、ウラル・アルタイ学会と名付けながらも、これら発起人の中にウラル諸語、つまりフィンランド語やハンガリー語の専門家がまったくいないことである。川崎直一がウラル語の関心を寄せていたことはまちがいないが、ウラル語の専門家というのには程遠い。また、言語だけでなく、ウラル文化や歴史の専門家もいない。これではウラル・アルタイ学会の看板は適切と言えるのだろうか。

また、「ウラル・アルタイ学会」と学会を名乗っていながら、発起人はその当時の関西在住研究者しかいない。全国規模の学会というよりも、大阪言語学会と同様、大阪周辺の研究者しか対象としなかったように思われる。じっさい、会則には「本会は本会の趣旨に賛成する京阪神付近在住の者を会員」とするとある。これが最終的にどう書き直されたのかはわからないが、全国規模の学会を意図していなかったことはあきらかだ。

もう一点、冒頭で引用した『史林』に紹介された文章では、第1回例会の講演発表が「挨拶 石濱純太郎、蒙古語文法書に及ぼせる西藏語文法書の影響 稲葉正就」となっている。しかし、この案内状では「1. 「ウラル・アルタイ学の処女地」石濱純太郎、2. 「蒙古語新資料の紹介」精松源一」となっている。この案内状が第1回例会の1週間前に書かれたことや稲葉が発起人に名をつられていないことなどを勘案するに、案内状が正しいように思われる。

3. ウラル・アルタイ学会の例会ー出版されたデータから

⁹ 勝藤猛(1999)「外山軍治教授の訃」『東洋史研究』58(3):633を参照した。

「はじめに」で引用した『史林』に掲載されたウラル・アルタイ学会の例会は、昭和 25(1950)年のものである。

それ以後の活動実態はどうだったのか。またいつまで続いたのか。それらについてみていこう。まず出版された、あるいは公開されたものをひろう。

長田夏樹の年譜¹⁰に、ウラル・アルタイ学会での発表が記されている。それをまず引用しておく。

1). 1950年7月 ウラルアルタイ学会（於大阪外大）で、「女真文字金石資料とその解読について」と題して研究発表する¹¹。

2). 1951年7月 ウラルアルタイ学会（於大阪外大）で、「契丹文字解読の可能性」と題して研究発表する。

3). 1954年1月 ウラルアルタイ学会（於大阪外大）で、「蒙古月名攷—至元訳語の月名を中心として」と題して研究発表する。

4). 1958年6月 ウラルアルタイ学会（於大阪外大）で、「原始アルタイ語の母音体系について」と題して研究発表する。

これら発表を裏付けるウラル・アルタイ学会からの案内ハガキが父の遺品からみつかった。それによると、まず1)については以下の通り。

7月例会御通知

- ・日時 7月9日（日）午後1時
- ・場所 大阪外国語大学大阪学舎（市電上本町八丁目下車）
- ・研究発表 長田夏樹「女真文字金石資料とその解読に就いて」

お詫び 今回は都合により第2日曜に延期致しましたが、この事につきまして、連絡不行届のためご迷惑をおかけしました点深くお詫び申し上げます。（幹事）

2)については以下のハガキが残っている。

ウラル・アルタイ学会7月例会開催御通知

とき・・・昭和26年7月1日（日曜日）午後1時
ところ・・・大阪外国語大学大阪学舎（上本町8丁目）
講演

¹⁰ 長田夏樹年譜は以下のサイトよりダウンロードできる。
<https://kodaimoji.her.jp/pdf9/nenpu.pdf>

¹¹ この発表については「はじめに」に引用した『史林』に掲載されたウラル・アルタイ学会の紹介文に載っている。

- A. 外山軍治氏「羽田博士還暦記念論叢を読みて」
- B. 長田夏樹氏「キタイ文字解読の可能性—村山七郎氏の研究を読んで」

3) については以下に案内ハガキを引用する。

1月例会御通知

- 1月24日(日)2時
- 於 大阪外国語大学大阪学舎(市電上本町八丁目下車)
- 講師(順不同)

長田夏樹 「蒙古月名攷—至元訳語の月名を中心として」

* 猶当日石浜石田両先生編の『東洋学叢編』をお持ちの方はもって来ていただければ便利かと存じます。

内田吟風¹² 「古代蒙古住民に関する二三の問題」

4) についても以下のハガキがある。

六月例会御通知

- 於 大阪外国語大学大阪学舎(市電、市バス上本町八丁目下車)
- 六月一日(日)午後二時
- 研究発表

長田夏樹先生(神戸外国語大学)

「原始アルタイ語の母音体系の比定に就て」

以上、例会の案内ハガキである。

ここでは年譜からみてきたが、話は逆だ。これら案内ハガキが残っていたからこそ、詳細なる年譜が作成できたのである。

まだほかにも出版されたものの中に、ウラル・アルタイ学会の記載がある。『英語青年』に以下の2回が掲載されている。

英語青年 = The rising generation 97(7)(1229)(1951)

Ramstedt 博士記念会 第一次世界大戦後日本へフィンランド公使として来任したヘルシンキ大学教授 Ramstedt 博士が昨年十一月廿五日亡くなったので、去る四月廿二日、大阪言語学会、ウラル・アルタイ学会、静安学社共同主催で大阪外国語大学において記念会を開いた。講演者は、川崎直一(「R.博士の思い出」、石浜純太郎(「R.博士の学問態度」、西田龍雄(「R.博士の唇音法説を弁護する」、長田夏樹(「R.博士の著書解説」)の諸氏で

¹² 内田吟風(1907-2003)は、日本の東洋史学者、神戸大学名誉教授。

あった。R.博士はアルタイ語の権威で、最後の著書は *Studies in Korean Etymology* であり、遺稿として *Ein führung in die altaischen Sprachwissenschaft* がある（川崎直一氏報）

英語青年 = *The rising generation* 98(8)(1242)(1952) 大阪言語学会 五月廿五日、関西大学で静安学社、ウラル・アルタイ学会との共同研究会を行い、つぎの講演をきいた。藤本勝次氏「アラビヤの言語と歴史」、高橋盛孝氏「口琴考」

前者についてはすでに長田(2022b:138-139) で大阪言語学会の例会として大阪言語学会からの案内状とともに紹介した。『英語青年』誌が伝えるように、この会は大阪言語学会、静安学社、ウラル・アルタイ学会の三学会による共同研究会であったが、じつは大阪言語学会からの案内状だけでなく、ウラル・アルタイ学会からの案内状も存在する。それを以下に紹介する。

ラムステット追悼会

1. 1951年4月22日(日)午後1時
 2. 大阪外国語大学（上本町八丁目）にて
 3. 講演
 - a. 川崎直一、ラムステットをしのぶ
 - b. 石浜純太郎、ラムステット博士の著書の解説と展観
 - c. 西田龍雄¹³、古代アルタイ語学
 - d. 石本健¹⁴、題未定
 - e. 長田夏樹、アルタイ比較言語学創始者の一人としての博士を偲ぶ
- 大阪言語学会、静安学社、ウラル・アルタイ学会共同主催
ウラル・アルタイ学会
高槻市 大阪外大 蒙古語学研究室

『英語青年』誌の紹介とこの案内状のタイトルにずいぶんと齟齬がある。

まず、石本健の発表が『英語青年』誌には報告されていない。実際当日に休んだ可能性はゼロではないが、他の題名も問題があることから考えると、報告者の川崎直一が単に忘れたのであろう。また、西田龍雄（「R.博士の唇音法則¹⁵を弁護する」）のタイトルも果たしてこ

¹³ すでに長田(2022b:139) で紹介したように、大阪言語学会からの案内状では西田龍雄の発表題名は「古代アルタイ語学私見」となっている。

¹⁴ 石本健の発表題名も、大阪言語学会からの案内状では「フィノ・ウグリヤ諸語における尸替の痕跡」となっている（長田 2022b:139）。

¹⁵ 長田(2022a:9)で紹介したラムステット博士からの手紙に、「日本に来る前に、私は、アルタイ諸語においてこの発展は(音声の変化の性質に沿って) *p> *p_c> p_φ> φ> h> [0] で

れでよいのか、よくわからない。いずれにせよ、こんなわかりにくいタイトルではなく、案内状にあった「古代アルタイ語学」がタイトルで、川崎直一には西田龍雄の発表がこのように聞こえたのかもしれない。さらに、長田夏樹（「R.博士の著書解説」）について、父が残した資料からタイトルは「アルタイ比較言語学創始者の一人としての博士を偲ぶ」でまちがいないはずである。この「R.博士の著書解説」というタイトルは石濱のものであろう。

もう一つ、『神戸市外国語大学二十年史』に「昭和 40(1965)年 4 月 24 日 ウラル・アルタイ学会を主催」との記載がある。ただし、どんな発表が行われたかの記述はない。また、長田夏樹年譜にもこのウラル・アルタイ学会が神戸市外大でおこなわれたことは記載がない。

以上が、出版されたものからの引用である。

4. ウラル・アルタイ学会の活動実態—精松源一のハガキから

出版されたもの以外にも、活動実態の一端を知る貴重なハガキがある。それは精松源一から父に宛てたハガキで、父の遺品からみつかった。それをここで紹介しよう。

昭和 28(1953)年 11 月 14 日消印のハガキをまず引用する。

拝啓 朝晩はめっきり寒くなりました。御壮健で御勤務の事と存じます。さてウラル・アルタイ学会も久しく休んでいましたが、こんどは十二月初の日曜に開きたく、就ては先生に御話を承はりたいと思いますが、如何でせうか。御話下さる材料も御ありの由、岡崎先生より聞いたので斯くはお願いする次第です。御同意を得ますれば、早速準備にかかりますから、御話の題も御聞かせ下さいませんか。宜しく御願ひ申し上げます。十二月初の日曜(六日)には忘年会を兼ねたらとの話も一、二の方から出ていますので、然うしたいと考えています。右取敢ず御願まで 敬具

その約 2 週間後の昭和 28(1953)年 12 月 1 日消印のハガキを次に引用する。

前略 先日は御無理を申し上げましたが、快諾の返事に接し大変喜んでいます。然るに不幸にして来る六日の日曜は学会多く、石浜、高橋両先生共に都合悪く、その他の方も出席不能の方が多様ですし、折角開会しても、出席者がなくてはせっかく遠方より見える講師の先生方に済まなく思ひまして、勝手ながら六日は中止としました。尚十三日にしようと思ひ講師の内田吟風先生の御都合をきゝましたが、今度は十三日が都合が悪いといはれたので、遂に無期延期として正月中旬の日曜に新年宴会を兼ねて開く考へです。誠に恐入りますが、右事情何卒御諒承下さいますよう御願ひ申し上げます。

あったはずだと言いました」と述べている音韻変化のことか。この音韻変化について、シロコゴロフが否定する論文を書いているので、ラムステッドを弁護したということなのかもしれない。このタイトルだけでは推測するのは難しい。

この二通のハガキからは、幹事である精松源一が長田夏樹に発表を依頼しておきながら、石濱純太郎の都合などがつかないために取りやめていることがわかる。また、「さてウラル・アルタイ学会も久しく休んでいましたが」とあることから、それほど頻繁には開催されていないこともわかる。結局、この二通のハガキのやり取りの後、上でみた3)「蒙古月名攷—至元訳語の月名を中心として」の発表がおこなわれたことになる。

つぎに紹介するのは、昭和 31(1956)年 5 月 22 日消印のハガキである。

拝啓 新緑の候、ご清適の段御同慶に存じます。平素は全く御無沙汰しています。扨てウラル・アルタイ学会も二年間、何もせずに来て、申訳なく思っていますが、先月現地に亡くなられた故山崎先生の追悼を意味し、故人を偲ぶ集りをしたいと思うのですが、貴兄が故人と極く親しくいられたので、故人の事もよく御分りと思ひ、故人について御話下さいませんか。会の日は六月十七日(日、午後二時)と決めています。御都合宜しければ会員皆さまに御通知する考です。宜しく御願ひ申し上げます。

このハガキには「山崎忠氏の人間と学問」という父の書き込みがある。つまり、この題で講演をおこなう予定だったのであろう。

ところが、この会は結局おこなわれなかったようである。それを示すのが以下の昭和 31(1956)年 5 月 27 日消印のハガキである。

拝復 本日御葉書を頂戴しました。承われば、四月以来ご病気であった由、一向に存ぜず御見舞も申上げず失礼しました。已に御登校の由ですが、すっかり治ったのですか。再発しないよう、今の内に十分に御養生なさって、又決して御無理をなさらん様にして下さい。この度は御無理をお願いして済みません。御快諾を得て感謝の至りです。しかし、石浜氏より六、一七(日)は他に会合があつて出席出来ないので、他日に延期してくれとの注文でした。従つて題名も未定です。折角ですが、六、一七は都合悪いので改めて石浜、岡崎両氏とも相談の上、何れ又御通知しますから、その時は宜しく頼みます。 敬具

最初のハガキに「ウラル・アルタイ学会も二年間、何もせずに来て、申訳なく思っています」とある。つまり、1954年1月に父が発表したウラル・アルタイ学会からは一切開催されてこなかったものと思われる。また、続いてのハガキでは、石濱純太郎の都合がつかず、精松が提示した6月17日に会合が開催されなかったことになる。

このことから、会則では「例会は五、六、七、十、十一、十二月の第一日曜日とする」とされていたが、このような年6回の開催は実行されていないことがわかる。また、正直述べれば、精松は幹事として失格である。発表をお願いしておきながら、石濱純太郎が参加できないことを理由に、二度にわたつて会合が延期されている。石濱の都合を優先されるのであれば、まずそれを押さえるべきであり、その日を決めてから発表者に都合を聞くべきでは

ないだろうか。

つぎに、昭和 33(1958)年 5 月 3 日消印のハガキを以下に引用する。

先生、突然で申し訳ありませんが、今月末の日曜にウラル・アルタイ学会を開きたいと思い、今日は先生に、昨年御連絡の不備で御願ひ出来なかつた貴方の御話を承はりたいと思っています。まげて御快諾下されば、早速会員に通知しようと思ひます。如何でしょうか。外には目下誰も心当りがありませんので、貴意を得たく、重ねて御願ひ申し上げます。 敬具

この時の発表が上での 4)「原始アルタイ語の母音体系について」(ただし案内ハガキでは「原始アルタイ語の母音体系の比定について」とある)にあたる。

以上が父の発表に関する精松からのハガキである。

じつは、これ以外にも精松源一からのウラル・アルタイ学会の案内ハガキが二通ある。それを紹介しておこう。

まず、1973 年 5 月 18 日の消印のハガキを紹介する。このハガキの差出人は「大阪外国語大学モンゴル語研究室内 ウラル・アルタイ学会」となっているが、筆跡などをみるかぎり精松源一が書いたものである。

ウラル・アルタイ学会開催御通知

拝啓 時下新緑の候いよいよご清建のことゝ拝察しお慶び申し上げます。扱、ウラル・アルタイ学会は久しく休んでいましたが、久し振りに左記の如く開くことにしましたので万障御繰合せの上御出席の程御待ちしております。

一、5 月 26 日(土)午後 1 時

一、大阪外国語大学新館二階会議室

天王寺区上本町八丁目

一、古代チュルク語における若干の母音の後退低下について

庄垣内正弘氏

発表終了後、故石浜純太郎先生のことに就て種々語り合いたいと思っております。

つづいて、1974 年 7 月 1 日の消印のハガキを引用する。

久しく御無沙汰しております。お元気ですか。扱て永らく休んでいましたウラル・アルタイ学会を左記の如く開きたいと思ひますので、万障お繰合せの上、ご出席賜りますよう、ご案内申し上げます。

記

1. 日時 1974 年 7 月 6 日午後 1 時より

1. 場所 大阪外国語大学新館二階会議室

1. 講師及び演題 宇野彰先生(大阪外大非常勤講師)「モンゴル旅行談」

これら二つのハガキは精松源一からのものである。しかし、精松は 1968 年に大阪外国語大学を定年退官している。本来ならば、退官後に精松の後を継いだものがウラル・アルタイ学会を運営すべきだが、この引き継ぎはおこなわれていない¹⁶。庄垣内正弘の発表はウラル・アルタイ学会にふさわしいと思うが、「モンゴル旅行談」がウラル・アルタイ学会にふさわしいとはとても思えない。庄垣内正弘も大阪外大モンゴル科出身であることから、ウラル・アルタイ学会という名の大阪外大モンゴル語科の研究会になってしまったということかもしれない。この 1974 年の会が最後のウラル・アルタイ学会の例会になったのではないか。後継者もいなかったことからこう推測するしかない。

以上、精松源一からのハガキを使って、ウラル・アルタイ学会の実態をみてきた。

5. おわりに

小論では、石濱文庫所収の石濱書簡の中の 1 通「ウラル・アルタイ學會假事務所（大阪外大内）」を取り上げ、そこに入っていた「ウラル・アルタイ学会会則」と「第 1 回例会案内状」を紹介し、その案内状に掲載されていた発起人について、それぞれ紹介をした。また、『英語青年』誌に掲載されたウラル・アルタイ学会の例会についても述べた。さらに精松源一から長田夏樹に宛てたハガキのなかに、ウラル・アルタイ学会について言及したものがいくつかあり、それを引用し紹介した。これによって、ウラル・アルタイ学会の実態がかなりはっきりとしてきた。

すでに小論のなかで指摘したが、いくつかの問題点があげられる。

1) ウラル・アルタイ学会とあるが、ウラル語やウラルの歴史の専門家などがほとんどいない。また、ウラルとアルタイの結びつきについても、戦後は否定的な立場を取る人が多くなり、ウラル・アルタイ学会という看板自体があまり効果をもたなくなってしまった。

2) 学会といいながら、日本全国をターゲットとしないため、研究者が少なくなってくると、学会の定期的な開催が難しくなってしまった。推測するに、父は石濱先生に聞いてもらいたいという一心で、ウラル・アルタイ学会で何度も発表をしてきたが、その石濱純太郎は戦後かなり忙しかったようで、石濱先生の都合がつかないために、ウラル・アルタイ学会が流れてしまったことも多々あったようだ。精松源一が幹事を務めたのはいいが、開催の決めるときに石濱の出席を第一とするのか、発表者の都合を第一とするのか、その方針が一貫しないために例会開催が不定期になってしまった。あれほど物持ちのいい父の手元にウラル・アルタイ学会の名簿がなかったが、あるいは発行されなかったのかもしれない。つまり運営

¹⁶ jijjつ、精松教授を継いだ橋本勝名誉教授に、私信でウラル・アルタイ学会についてお聞きしたところ、全く存じ上げないというご返信をいただいた。ご協力くださった橋本名誉教授にこの場を借りて御礼を申し上げる。

上の失敗も大きい。

3) 全国規模のアルタイ学会にあたる野尻湖クリルタイが 1965 年から開催されるようになり、長田夏樹年譜によると、父は第 1 回から参加している。アルタイ諸語を専門とする、筆者の恩師である池上二良をはじめ、歴史を専門とする山田信夫¹⁷との交流、また大陸で一緒だった佐口透¹⁸との再会を父がうれしそうに語っていた。楽しそうに酒を飲んでいた父の姿を、まだ小学生だった筆者も覚えている。ウラル・アルタイ学会という学問的な交流の場がこのクリルタイで奪われてしまうと、ますます存在理由が希薄となっていったことはうたがない。

4) ウラル・アルタイ学会の最後についていえば、学会は幹事である精松源一とともにあったため、精松が定年退官してしまうと誰も引き継ぐものがなく、小論で述べた 1974 年の開催が最後になったのだと思われる。精松はモンゴル語学者であり、看板である「ウラル・アルタイ学会」が言語学的に何を意味するのか、そんなことは全く考えた形跡がない。ましてや、ウラル語について学ぼうという気もなかったようだ。むしろ、石濱純太郎にウラル・アルタイ学会の幹事をお願いされ、運営を任されてきたが、ウラル・アルタイ学会の名前で能動的に何かをやろうとしたことはなかった。晩年、石濱の死後、ウラル・アルタイ学会の名前での会合は、大阪外大モンゴル語学科の同窓会的なもので、ウラル・アルタイとはまったく関係しない。それが結局、ウラル・アルタイ学会の衰退を招いたのであろう。

学会を運営し継続していくためには、石濱個人の力では無理がある。ウラル・アルタイ学会が発会された時、石濱はすでに 60 歳を超えていた。年齢からの衰えもあっただろうし、何よりも戦後は大学の勤務もありかなり忙しかった。結局、幹事を精松源一に任せたが、これがうまく行かなかったため、衰退してしまった。これが小論の結論である。

参考文献

大阪外国語学校同窓会本部編(1943)『会員名簿』(国会)

大阪外国語大学 70 年史編集委員会編(1992)『大阪外国語大学 70 年史』大阪外国語大学 70 年史刊行会。

岡崎精郎(1979)「大阪東洋学会より静安学社へ—大阪学術史の一こまとして—」森三樹三郎博士公寿記念事業会編『森三樹三郎博士公寿記念東洋学論集』朋友書店。1383-1402 頁。

岡崎精郎(1983)「石濱・石田両博士学術交流記録抄」『古代文化』35:33-42。

岡崎精郎(1984)「石濱・石田両博士学術交流記録抄(続)」『名古屋学院大学論集』20(3):9-30

長田俊樹(2021)「大阪言語学会要覧について」『KOTONOHA』228:1-19。

長田俊樹(2022a)「大阪言語学会会報について」『KOTONOHA』230:1-32。

¹⁷ 山田信夫(1920-1987)は、東洋史研究者で大阪大学名誉教授。山田信夫(1978)「クリルタイのこと」『生産と技術』30(1):18-20 によると、このクリルタイの呼びかけ人の一人がこの山田信夫であったという。

¹⁸ 佐口透(1916-2006)は、東トルキスタンの研究で知られる東洋史研究者で、金沢大学名誉教授。第二次世界大戦中は民族研究所に勤務し、父とは張家口で出会ったのだという。

- 長田俊樹(2022b)「石濱シュレーに集う人々ー四半世紀後に」『日本研究』 64:123-158。
- 長田俊樹(2022c)「静安学社の講演について」『KOTONOHA』 231:1-30。
- 長田俊樹(2022d)「宣教師的語学者・渡部薫太郎ー石濱シュレーの人々(1)」『KOTONOHA』
- 長田俊樹(2023)「石濱シュレーに集う言語学者たち」 玄幸子編著『内藤湖南と石濱純太郎 近代東洋学の射程ー内藤・石濱両文庫収蔵資料を中心に』 関西大学出版部。(65)-(96)頁。
- 勝藤猛(1999)「外山軍治教授の訃」『東洋史研究』 58(3):633。
- 川崎直一訳(1954)「フィノ・ウグール諸語およびサモイェード諸語(オレリアン・ソヴァジヨー)」メイエ、コーエン監修、泉井久之助編『世界の言語』朝日新聞社。
- 玄幸子(2022)「石濱文庫所蔵書簡資料の web 公開に向けて」『KU-ORCAS が開くデジタル時代の東アジア文化研究：オープン・プラットフォームで浮かび上がる、新たな東アジアの姿』 61-70 頁。関西大学リポジトリ公開。
- 玄幸子(2023)「書簡からみる石濱純太郎と東洋言語学者たちー泉井久之助ほか訳『世界の言語』編纂過程を取り上げて」 玄幸子編著『内藤湖南と石濱純太郎 近代東洋学の射程ー内藤・石濱両文庫収蔵資料を中心に』 関西大学出版部。(39)-(64)頁。
- 神戸市外国語大学二十年史編集委員会編(1966)『神戸市外国語大学二十年史』 神戸市外国語大学。
- 近藤治(1993)「岡崎精郎教授の急逝を悼む」『東洋文化学科年報』 8:23-25
- 佐藤誠(1975)「経歴と業績」『琉球大学語学文学論集』 20:6-12
- 諸井慶徳(1956)「山崎忠氏を偲ぶ」『東方宗教』 11:87-88
- 山田信夫(1978)「クリルタイのこと」『生産と技術』 30(1):18-20
- 山本達郎(1988)「桑田六郎博士の訃」『東洋学報』 69:217-219

付録

以下の「経歴と業績」は『琉球大学語学文学論集』に掲載されたものです。かなりの誤字脱字があり校正が必要ですが、どれが本当なのかわからないほどの間違いなので、このままの形で掲載いたします。(長田記)

経歴と業績

佐藤誠

昭和 11 年 4 月 東京帝国大学文学部言語学科。

在学中に小倉進平先生に朝鮮語を、金田一京助先生にアイヌ語の指導をうける。二年次言語学演習にカールグレンの文献学と(古代支那の)原書講読を受講し、指導をうけ、このため音韻に深い反省を持った。三年次には、小倉進平先生の言語学演習でドーザの言語地理学の原典講読を受講し、方言研究

の認識を新らしくした。前記言語学演習の修了単位として、「いたどり」を指示する方言の言語地理的考察をレポートして提出し、後日このレポートを「声音教育」誌の誌上に発表した。

小倉先生は講義の中で時折り言語を考察するのは文字だけでなく、音声に注意をはらうべきだとさとされた。

この為、神保格先生の一般音声学の講義を受講し、音声の面の知識をあらためて、深く研究した。

尚三年次において、言語研究は本来母語である日本語に就いて研究すべきであると考えて、橋本進吉先生の国語学の講座に出席した。たまたま東條操先生が方言学の講義を講師として開講されるという事で、方言学の講義を聴講し、この間、南島の文化と言語に対して深い興味を持つようになった。これより沖縄関係のものをむさぼり読むようになった。三年次において、室町時代の国語の研究を決意し、吉利支丹ざんげ録にあらわれた国語の音韻を研究し、これをまとめて卒業論文として提出し、昭和13年3月卒業した。

昭和13年4月 東京帝国大学文学部言語学科大学院入学。

大学三年次における小倉進平先生の、ウラルアルタイ語比較文法の講義に感銘を受けたためトルコ語研究のための関係文献を検討しトルコ語方言の研究調査を行なうという意欲を持って研究生生活をした。

昭和15年3月 大学院を満期修了。

昭和14年4月 皇典講究所国学院附屈図柑館司占就任。

昭和15年8月 同退職。

9月 東京帝国大学附属図書館事務取扱を嘱託さる。

昭和16年4月 同退職。

4月 文部省推隅図書調査嘱託さる。

7月 現職のまま応召。

昭和18年1月 召集解除原職復帰。

昭和19年4月 同退職。

5月 蒙古善隣協会副参事、興亜義塾教授就任。言語学、トルコ語、ロシア語を担当。善隣協会に転出したのは、大学時代よりの学友現名古屋大学文学部言語学科主任教授野村正良氏の推挙により興亜義塾の職についた。興亜義塾においては、東トルコ語（ウイグル語）カシガル県出身のバイイ、ヤクベ両氏についてウイグル語の方言を学習した。一応ウイグル語による日常会話が可能になり同時にウイグル方言の文法体系を明らかにすることが出来たが、不幸にして日本の敗戦により内蒙古を引揚げるため、ウイグル方言の文法に関する原稿や資料を義塾の図書館におさめ、思いをサマルカンドの空に残しつつ、張家口北京を終て天津に脱出することになった。

- 昭和 20 年 4 月 現職のまま大東亜連成院第参部入院。
- 8 月 右退院、原職復帰。(新宮まで方言採集旅行を行った。この目的は否定を表わす言語形式の方言的調査であり、この方言採集旅行の結果は後日、九学会連合による共同課題、交通・川・労働を發表することとなり、これらが母体となり、言語と交通と題して發表した。)
- 昭和 21 年 5 月 日本引揚、同協会解散の為自然退職
- 7 月 帝国図書館事務取扱を囑託さる。
- 昭和 23 年 1 月 同退職。
- 昭和 23 年 1 月 天理語学専門学校教授就任。言語学、国語学担当。
- 昭和 24 年 4 月 天理大学教授兼言語専門学校教授就任。言語学、国語学担当。
- 天理大学時代中村忠行教授と大阪市立大学教授兼弘雅雄氏とで大和五条を起点とし、熊野街道をくだり、十津川を経て、新宮まで方言採集旅行を行った。この目的は否定を表わす言語形式の方言的調査であり、この方言採集旅行の結果は後日、九学会連合による共同課題、交通・川・労働を發表することとなり、これらが母体となり、言語と交通と題して發表した。
- 昭和 25 年 4 月 天理大学女子短期大学部講師就任。児童文化担当。
- この間民話に興味を持ち、特に北方アジアの民話の研究資料をあつめた。後日、世界民話全集のなかで公刊された。
- 昭和 26 年 4 月 同退職。
- 昭和 27 年 4 月 宇都宮大学学芸学部非常勤講師就任。言語学担当。
- 任期 昭和 27 年 4 月－昭和 29 年 3 月
- 昭和 28 年 8 月 関東短期大学非常勤講師就任。言語学担当。
- 昭和 29 年 4 月 文部教官北海道学芸大学教授、函館分校に採用される。言語学、国語学、一般英語担当。北海道教育大学時代於ては専ら北海道方言に就いてその多様性をさぐり、その多様性は北海道へ和人の移住定着の過程によって方言の多様性が生じたものと考え、その結果、人文論究に団体移住部落とその言語の世代的変容を、北海道に於ける団体移住部落とその言語の実態と、共通語化の過程について調査を發表した。この發表により昭和 41 年国立国語研究所より地方研究員を委嘱され、北海道南部の方言を調査研究するようになった。
- 昭和 41 年 4 月 聖徳学園女子短期大学非常勤講師就任。保育内容の研究(言語)担当。
- 昭和 42 年 3 月 北海道教育大学辞職。
- 4 月 札幌大学教授就任。
- 札幌大学在職中には沖縄県石垣市出身の宮良高弘氏の知遇をうけ、同氏より南島の文化と言語につき種々の御教授をうけた。更に北海道教育大学時代に行った末整理の北海道方言の調査資料につき、北海道大学五十嵐二郎教授及び北海道新聞編集局の大沢哲夫氏の御好意により、ほっかいどう語

とその発生と発達について公刊されることになった。

昭和 45 年 6 月 札幌大学辞任

7 月 聖徳学園女子短期大学教授就任。言語学、比較文学担当。

北海道教育大学在職中幼児の言語教育について、聖徳学園女子短期大学では保育内容の研究（言語）を担当することになり、この結果同志をつのり、幼児の言語教育と題するものを出版することが出来た。

昭和 46 年 9 月 同辞任。

10 月 琉球大学教授就任。

昭和 50 年 4 月 停年退職。

琉球大学在学中は仲宗根政善教授の御好意によりおもろ研究会に出席させて頂き、先生の深い学識より生れるおもろの解釈を有がたく拝聴した。尚前学部長富永眞演教授の御配慮により、南島（石垣・平良市）方面の方言を調査し、その結果、南島の民話「ユガタズ」に興味を持ち、今後この「ユガタズ」の解明を行うと決意して帰島した。尚この旅行に際して本土と沖縄の文化の関係性を柳田国男先生は海上の道と把握されたが、この調査旅行で、本土と沖縄の関係はみをつくしの関係にあると考えた。その結果沖縄本島と日本本土とはみをつくしの文化圏にあると思うようになった。命ある限り、このみをつくし文化圏の解明に精進しようと思決意している。琉球方言、特に「ユガタズ」について多分の資料を提供して頂いた琉大方言クラブの方々に御厚意を感謝いたします。

大学設置審議会の教員審査の決定

審査学科目 言語学

職名 教授

判定年月 昭和 24 年 2 月 21 日

申請大学名 天理大学

審査学科目 国語学

職名 教授

判定年月 昭和 24 年 2 月 11 日

申請大学名 天理大学

審査学科目 児童文化

職名 教授

判定年月 昭和 25 年 3 月 14 日

申請大学名 天理大学

業績目録

1. 奈良県方言文献誌--奈良県方言調査資料--1-- 天理大学出版部
日本文化第 32 号 昭和 27 年 11 月 25 日 天理大学宗教文化研究所刊
2. 奈良県風俗誌所載方言資料抄--奈良県方言調査資料-2-
日本文化第 33 号 昭和 28 年 7 月 25 日 天理大学宗教文化研究所刊
3. 言語と交通・共同課題一交通・川・労働
九学会連合編 人類学科 第 5 集 昭和 28 年 5 月 紀元社刊
4. 現場の国語教育 上下 2 巻
児童言語研究会編 大久保忠利氏と共同執筆 昭和 29 年 4 月 春秋社刊
5. チェンギズナーメ (成吉思汗) の書誌紹介
小林高四郎博士と共同執筆 人文論究 第 17 号 昭和 32 年 6 月 30 日
北海道教育大学函館分校刊
6. 団体移住部落とその言語の実態的調査
人文論究 第 18 号 昭和 33 年 3 月 北海道教育大学函館分校刊
7. チェンギズナーメ(II)付録
人文論究 第 20 号 昭和 34 年 12 月
8. 北海道総合開発企画本部科学研究報告(3)
昭和 35 年 7 月
9. 団体移住部落とその言語の世代的変容
共同課題一文化の接触と変容
九学会連合編 人類科学 第 14 集 昭和 37 年 3 月 新生社刊
10. 北海道方言の実態と共通語化の過程に就いての覚え書(1)
函館英文学(III) 昭和 39 年 1 月 北海道教育大学函館分校刊
11. 北海道方言の実態と共通語化の過程に就いての覚え書(2)
函館英文学(IV) 昭和 42 年 2 月 北海道教育大学函館分校刊
12. 北海道方言の実態と共通語化について
函館郷土史研究会編 昭和 41 年 3 月 函館図書館刊
13. 国語研究所報告書 27 号
北海道における親子三代の言葉の共通語化の過程 昭和 40 年 4 月 2 日
共同調査員として行った調査結果を資料として提出したものである。
14. ほっかいどう語一その発生と変遷
昭和 45 年 6 月 北海道新聞社編
15. 幼児の言語教育 共著
昭和 50 年 3 月改題 東京建帛社刊
16. 領域言語の指導
昭和 50 年 3 月改題 東京建帛社刊
17. 現代言語学紹介 共訳

- 昭和 20 年 5 月 東京泰文堂刊
18. トルコ及びチュルク系諸族の民話訳
世界民話全集 (6) 近東編 昭和 29 年 9 月 河出書房
 19. アルタイ系の民話訳
世界民話全集 (8) 地方アジア編 昭和 29 年 10 月 30 日 河出書房
 20. お国ことばのユーモア集 柴田武編
昭和 36 年 10 月 東京堂刊
 21. トルコの民謡及び童謡原訳 中沢公平編
昭和 40 年 2 月 中部日本新聞社刊